夢千代日記

早坂暁

夢千代日記

早坂暁

大和書房

夢千代日記

一九八三年一二月二五日　第一刷発行
一九八四年　二月二四日　第五刷発行

著　者　早坂　暁

発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一-三三-四
郵便番号　一一二
電話　(二〇三)　四五一一
振替　東京六-六四二二七

印刷所　信毎書籍印刷
製本所　ナショナル製本
装　画　竹久夢二
装　幀　市川英夫

©1983 A. HAYASAKA Printed in Japan
ISBN4-479-54015-6
乱丁本・落丁本はお取替します

夢千代日記

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夢千代日記　7
続・夢千代日記　117
あとがき　214

夢千代日記

早坂暁

夢千代日記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

●山陰の空の下

どんより鉛色に曇った空の下、山あいから列車が抜け出てくる。

女の声「あんなに表日本は晴れていたのに、山を抜けたら一べんに鉛色の空になっている」

●列車の中で

女がひとり、窓辺に坐り、鉛色の空を眺めている。

——永井左千子、三十四歳。

髪を無造作にうしろに束ね、どちらかというと地味な身なりである。

左千子の声「十一月二十日……どう書けばいいんだろ、晴れ、のち、曇り」

立ちあがって、網棚のバッグをとろうとする。が、不意に崩れるように坐ってしまう。

目を閉じ、両手で顔を蔽って、上体を深く前に屈した。

しばらく、そのままで動かない。

左千子の声「……久しぶりの旅なので、目がくらむ。流れおちるように、血が引いていく」

座席には相客はなく、車内にも旅客はほんの少しなので、誰も、見とがめる者もない。

——ゆっくりと、両手を顔から離した。目をあけたが、まだ、そのままの姿勢でいる。

左千子「……！」

その目の下を赤いものが、前方からころがってくる。蜜柑(みかん)だ。

一つ、二つ、三つ——、左千子のハイヒールに当ってとまった。

左千子、ひろいあげ、上体をあげた。

一つ前の座席から、三十すぎの男が立ちあがって、こちらをのぞく。
男「あっ、そっちまで行きましたか、すみません」
左千子「いいえ」
蜜柑をさしだす。
男「どうぞ、よかったら食べて下さい」
左千子「いえ……」
男「あっ、そうか、転がったのは、汚いですよねえ。すみません」
身をのり出して、蜜柑を受けとる。が、すぐに、別の蜜柑を両手に無骨につかんで、さしだす。
男「どうぞ、こっちはきれいですから」
左千子「いえ、わたし、けっこうです」
男「ま、よかったら」
左千子の前の座席に置く。
男「少し買いすぎたんですよ」
気さくに笑んでみせ、背をむけて前のボックスに坐ってしまった。
左千子「……」
男は旅の人だろう。
棚の上に、ボストンバッグを一つ、載っけている。
左千子、蜜柑をそのままに、窓に顔をよせ、目をとじる。まだ少し目が舞うのだ。

ガラガラと、大きな音がする。
左千子の声「この音は山陰の音です。これを聞くと、帰ってきた気がします」
目をとじたまま、聞いている。

●餘部の鉄橋

海辺に迫った山あいに、恐しいばかりの高みで鉄橋がかかっている。
その上を列車が大きな音をたてて渡っていく。

●列車の中で

男が、窓辺に顔をつけて、下をのぞいている。
男「すごいなあ……」

●鉄橋からの眺め

はるか下の、せまい平地に、屋根瓦の家々がかたまって建っている。限りなく白波がおしよせてくる海に向って、可憐とも見える防波堤が突き出し、その中に小さな漁船がみえる。——小さな漁港である。

●列車の中で

男「(小さく)まいったなあ……」
眺めへの、男の感嘆符である。

男「(左千子に) この鉄橋、どこですか」
左千子「(目をあけた) アマルベです」
男「アマルベ……こりゃァ、おちたら一発だ、一発で死ぬなあ……」
硝子に顔を押しつけて、下をのぞいている。
——男の名前は山根信二、三十五歳。
車内放送「お尋ねします。神奈川県川崎署の山根刑事さん、山根刑事さん、おられましたら、五号車の車掌室までおいで下さい。連絡が入っております」
山根「なんだ、こんなとこまで追っかけて……」
ぶつぶつ、前方へ小走りに急ぐ。
左千子「！　刑事……」

●日本海ぞいを列車がゆく

海もまた鉛色である。

●列車の中で

山根が帰ってくる。
彼の座席に、蜜柑が丁寧においてある。
山根「?!……」
うしろをみると、左千子の姿はない。

●駅で

ここは山陰の小さな駅。列車が着いている。
数十人の団体客にまじって山根が改札口を出る。
ひなびた温泉の町である。
——湯の里温泉。
山根「……あっちのコート、着てくりゃよかったなあ」
寒いのだ。

●湯の里温泉街で

川が流れている。
湯が流れているのだろう。もうもうと湯気をあげている。
川べりの湯で卵を茹(ゆ)でている女たちがいる。——〝荒湯〟という。
橋の上から山根が見下している。
川べりに沿った両側に旅館が並んでいる。
山根「……」
つと、欄干(らんかん)を離れて歩きだした。
山根「あッ！」
若い女が、まるで滑るように迫ってきた。
若い女「あ、あ！」
お互い、避けきれず、半身でぶつかってしまう。

女がかかえていたものが橋の上に散乱する。
野菜や、インスタント食品、週刊誌などだ。――スーパーの帰りなんだろう。
若い女「急に動くからァ……」
二十七、八か、ジーパン姿に、なんとローラースケートをはいている。
山根「なんだ、ローラースケートか」
女は、道のものを集めている。
山根も手伝う。
若い女「いいけん。いいけん」
但馬弁で手早く集めていく。
山根「……それ、道路交通法違反じゃないのかなあ」
若い女「なによ、ドーロコーツーホー?」
山根「いや、こういうところでローラースケートやるの」
若い女「ほんにかえ?! 警察のヒト、なんも言わんよ」
山根「警察署、どこ?」
若い女「! あんた、むつかしいことにするんね」
山根「え?」
若い女「あたしを突き出すの?」
山根「いや、そうじゃないよ、警察署をさがしているんだよ」
若い女「……そこ曲って、右」
言いすてると、買い物袋をかかえて、女は去っていく。
長い脚のジーパン姿、なかなか上手いローラーだ。

●警察署

二階建の古びた建物。

●署内・刑事室で

刑事課長の藤森、五十歳。
藤森「あ?……」
山根「神奈川県川崎署の山根です」
藤森「ああ、おつきでしたか! お迎えにも行きませんで失礼しました」
山根「いや、迎えなど……」
藤森「ま、どんぞ、どんぞ」
椅子をすすめる。
藤森「安岡君、お茶!(顔を近づけ、小さく)わたしらの調べはお役に立ちませんでしたか」
山根「いや、そういうわけじゃありませんが」
藤森「正直なところ、事件の詳しいことも教えてもらえんしね。いや、いや、いや、皮肉でもなんでものうてね。やっぱ、表日本の都会の警察にくらべると、どうしてもこっちは、とろいですけん」
山根「実は殺しがからんでいる事件です」
藤森「! そら、大けなヤマですなあ!」

山根「しばらくご厄介になると思います」

●夕暮の温泉街

●路地

小さな石段をおりてくる山根。

山根「……」

不意に芸者がひとり、あわただしく脇の家から駈け出てきた。

四十歳位の大年増芸者——菊奴。

菊奴「ヘデテ来ル敵ハ、ミナミナ殺セ」

突撃ラッパの、それだ。

菊奴「あ」

階段のところで、山根にばったり。

山根「あの……」

菊奴、ものをいわず、もとの出口へ、急いで入ってしまう。

山根「？」

と、こんどは三味線をかかえて、再び駈け出てくる菊奴。

山根「ちょっと聞きたいんだけど」

菊奴「あたし、急いでンの」

山根「置屋のはる家って、どこ？」

菊奴「はる家？　ここ」

山根「あ、どうも」

菊奴が出てきたところへ入って行こうとする。

菊奴「あ、いけん！」

山根「え？」

菊奴「ここはいけんの」

山根「どうして」

菊奴「急いどるのに、もう……。ここはな、うちら芸者の出入りする裏口じゃけん、お客さんの出入口はあっち、ほら、電灯がつい……あ、ついとらん。（奥へ）おスミさーん！　玄関の灯り！」

大きな声だ。

忽ち、門燈に灯が入った。

小さく〝はる家〟とある。

菊奴「ね」

菊奴、階段をあがって駈けていく。

また、「デテ来ル敵ハ、ミナミナ……」と口ずさんでいる。

山根「……」

はる家の玄関の前に立つ。小さな門があってすぐに玄関である。

戸をあけた。

山根「こんばんは」

菊奴、とっくに行ったかと思ったが階段の中途までひきかえし、玄関のほうをうかがっている。
菊奴「かなりええ男」

●はる家で

ここは置屋である。
といっても田舎の温泉町の置屋。
しかも、トップクラスではない。
奥から、おスミさんが出てくる。
——杉岡スミ(60)、はる家に住み込んでいる、おばさんである。
どことなく品がよく——実は、京都の呉服屋の奥さんだったそうだが、わけあって、今は温泉町の置屋に住み込んで、もう長い。
スミ「はい……」
山根「ここは置屋のはる家さんだね」
スミ「そうです」
山根「お女将さん?」
スミ「いえ。ちがいます。わたしは住み込みの者です」
山根「お女将さん、いる?」
スミ「どなた様でしょう?」
山根「(警察手帳をみせ)ちょっと色々聞きたいことがあってね、来たんだけど」
目は奥のほうをさぐっている。
これは刑事という職業の癖である。
スミ「今、出かけておって留守ですけんど」
山根「どちらへ?」
スミ「煙草屋さんです」
山根「ああ、じゃ、すぐ帰ってくるんだ」
スミ「いえ、煙草屋いうのは旅館ですから。すぐには」
山根「ああ、煙草屋という旅館」
スミ「今日は少しおそくなると思いますけど」
山根「会合か、なんか?」
スミ「団体さんが入っとりますけん」
奥から声。
女の声「オバチャン!」
スミ「すぐ行くから」
山根「その煙草屋ちゅう旅館、どこか、教えてよ」
奥から、芸者姿の女が出てくる。
〝雀〟という。
丸まげ姿だが、帯がまだ中途半端でその端を手に持っている。
雀「オバチャン、早くう! あら、お客さん……」
山根「(スミに)どうぞ、どうぞ」
雀「あら、あんたァ!」
山根「は?」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com